

“いにしえのかわにし” 2

古代豪族が眠る「^{しょうふくじこふん}勝福寺古墳」



後円部横穴式石室入口



銀象嵌竜文刀

火打2丁目の丘の上にある勝福寺古墳は、明治24年(1891)に偶然発見され、横穴式石室から銅鏡、鉄刀等豊富な副葬品が出土しました。平成14～16年には、大阪大学考古学研究室と川西市教育委員会で合同発掘調査が行われ、多くの成果が得られています。

墳丘は、全長約40メートルの前方後円墳で、墳丘上には埴輪が並べられていたことがわかりました。埴輪は、円筒埴輪がほとんどですが、家形や甲冑形などの形象埴輪も出土しています。明治時代に発見された横穴式石室(第1横穴式石室)の位置は、後円部にあたります。精美な横穴式石室であることや、出土した銀象嵌竜文刀(ぎんぞうがんにゅうもんとう)、画文帯神獸鏡(がもんたいしんじゅうきょう)などの優れた副葬品より、中心的な人物の埋葬施設と考えられます。また、その石室入口の前では小型の第2横穴式石室が見つかりましたが、その子孫が葬られたものと思われる。一方前方部では、昭和46年(1971)の発掘調査で金製耳環、銀製クチナシ玉などを副葬した木棺が見つっていますが、中心的な人物の兄弟などの親族とみられます。

勝福寺古墳が築かれたのは6世紀初め頃で、葬られた人物は川西南部を支配した首長とその親族であったと考えられます。大規模ではありませんが、古墳のなかでも格式の高い前方後円墳であることや、当時近畿では最新式の横穴式石室をいち早く築いていること、優れた副葬品などからすると、中央政権と結びついた有力な豪族だったのでしょう。

現在、勝福寺古墳は管理のため柵で封鎖していますが、団体見学の予約に限り市教委の文化財担当課で見学対応を行っています。また、古墳から出土した遺物は、川西市文化財資料館(南花屋敷2丁目13-10、月曜日・年末年始休館)で常時展示公開しています。